

タイトル	第七回シンポジウムのバックストーリー：深井智朗氏の研究不正事件とそこに含まれる人文学／人文科学の重要問題
著者	安酸，敏眞；YASUKATA, Toshimasa
引用	北海学園大学人文論集(69)：2-11
発行日	2020-08-31

第七回シンポジウムのバックストーリー — 深井智朗氏の研究不正事件とそこに含まれる人文学／ 人文科学の重要問題 —

学長 安 酸 敏 眞

昨年の十月にドイツからミュンヘン大学名誉教授のフリードリヒ・ヴィルヘルム・グラーフ博士を日本に招待する計画を立て、本学のほかに京都大学、東京大学、東北学院大学などでシンポジウムや講演会などを開催した。わたしはこの一連の行事を「F. W. グラーフ博士日本ツアー 2019」と名づけ、その立案から具体的な実施にいたるまでの、ほぼすべてに主導的な役割を果たした。その主要内容は、三月末に北海学園大学出版会刊行の第一号として世に送り出した『真理の多形性 — F・W・グラーフ博士の来日記念講演集 —』の「第一部 講演篇」に収録されているので、それをご覧いただきたい。

グラーフ博士の略歴と業績、および彼とわたしの三十数年霜にわたる交流についても、その書のなかの「解題」においてかなり詳しく綴っておいなので、ここで詳細を繰り返すには及ばないであろう。重要なポイントは、グラーフ博士は現代ドイツを代表する神学的知性であり、キリスト教とか神学に携わっている人は誰でもその名前は知っている有名人だということ、彼とわたしはトレルチ (Ernst Troeltsch, 1865-1923) という神学者＝哲学者を研究する研究仲間であり、お互いが三十歳そこそこのときから日常的な交流を続けてきたということ、そしてわれわれの共通の友人であった故高野晃兆氏 (大阪府立工業高等専門学校名誉教授) の強い要望で、グラーフ博士を日本に招致する今回の計画が持ち上がり、わたしがグラーフ博士と緊密な連絡を取りながら全日程を立案したことである。

京都大学でのシンポジウムと東京大学での講演については、グラーフ博

士のまさに専門分野である近代プロテスタント神学史とエルンスト・トレルチ研究から、最もホットなテーマを選んだ。すなわち、前者では「リベラル・プロテスタンティズムと京大キリスト教学の伝統」、後者では「トレルチの『社会教説』の現代的意義」と定めたが、最も悩んだのは自分が学長を務めている本学での二つのシンポジウムと講演をどういうテーマにするかであった。本学はキリスト教大学ではないので、グラーフ博士の主戦場である分野から適切なテーマを選ぶのが困難だったからである。いろいろ思案した結果、まず開発研究所主催の国際開発キックオフ・シンポジウムの主題を「伝統・開発・グローバル化——国際開発の課題と展望」に決め、このシンポジウムのためにもう一人の特別招待講演者として、東京大学名誉教授で現学習院大学教授である末廣昭氏に依頼した。末廣氏は本学経済学部の宮島良明教授の恩師であると同時に、わたしの米子東高等学校時代の同級生でもあったので、宮島先生を介して比較的すんなり話がまとまった。

次に、「ヨーロッパの多様性とEUの現状」と題してなされた公開講演であるが、これはもともと札幌市とミュンヘン市の姉妹都市友好事業の一部として企画したものであった。そのためにわたしはグラーフ博士をお願いをして、ミュンヘン市長からの親書を携えて来日してもらい、公開講演の前日に札幌市役所に秋元克広市長を表敬訪問する機会も設けた。姉妹都市友好事業の計画が進捗する過程で、本来札幌市民を対象にした公開学術講演会は、北海学園大学人文学部特別講演会に指定していただき、学校法人北海学園から特別な経済援助もいただくことになった。わたしがグラーフ博士をお願いしたのは、現下のヨーロッパとEUの現状と将来的展望を、ヨーロッパに暮らす者の内側の目をもって、その深層部分まで掘り下げた講演を、学生や一般市民にわかり易く語って欲しいということであったが、グラーフ博士はわたしが予想していた以上に素晴らしい準備をして、この講演に臨んでくださった。

さて、残りの一つの北海学園大学人文学会の第七回シンポジウムとして開催された、まさに本誌にその詳細な記録が掲載される当のイベントである

が、このテーマ設定の背後にあったのは、一昨年来、わが国のキリスト教
 学関係者ならびに人文科学者たちの間で大きな話題を呼んだ、当時東洋英
 和女学院院長の要職にあった深井智朗氏による研究不正疑惑問題であっ
 た。そこにはここではじめて明らかにする秘められたバックストーリーが
 ある。

深井智朗氏の研究不正（捏造と盗用）問題は、本学准教授の小柳敦史氏
 が、日本基督教学会誌『日本の神学』第五十七号（2018年）において提示
 した公開質問状に端を発して表面化した問題である。小柳氏の公開質問状
 とそれに対する深井氏の「回答（暫定的）」は、同誌二二四-二三二頁に収
 録されているが、ここに盛られた文字情報だけから問題を判断しようとす
 ると、小柳氏の指摘は正しいとしてもそこまでいきり立つ必要はなく、む
 しろ告発された深井氏が気の毒だとの深井同情論が、一定の範囲の神学者
 やキリスト教学者たち、とりわけ一般のキリスト教信者の間で起こったの
 も、理解できないことではなかった。有名な神学者であり説教者である深
 井氏に、一介の地方大学の未信者の准教授が売名目的で嘔みついただけだ、
 と見る向きもあった。しかし事実はそういうことでは決してなかった。そ
 こには見過ごすことのできない重要な学問性の問題が潜んでいた。

当初わたしは、以下に記すような特別な事情があって、この問題に関し
 て静観を決め込んでいた。深井氏に近い人たちの間では、小柳氏の背後に
 黒幕としてわたしがいるというような、実に赦しがたい憶測を述べる者も
 いたと耳にした。しかしこれはとんでもない誤解である。わたしは十数年
 に及ぶ経験を通じて、もはやこの手合いには一切かわらず、ひたすら自
 分の研究に専念していたからである。にもかかわらず、この問題に対する
 キリスト教会本部の首脳陣の対処の仕方に、わたしが内心少なからぬ疑
 問を抱いたこともまた事実である。というのは、事柄の真偽を責任的に解
 明しようとするのではなく、両論併記で学会誌に掲載し、あとは読者の判
 断に委ねるといふ、責任逃れの事なかれ主義が透けて見えたからである。

ところが、『キリスト新聞』のWeb版「Kirishin」（二〇一八年一〇月四
 日）が「質問と応答 会員から会員へ」という学会誌の記事を取り上げて

報ずると、すぐにハイエナのような週刊誌が飛びつき、次第に他のマスコミにも反響の輪が広がっていった。何せ名門のキリスト教女学院院長を務める有名神学者の不正疑惑問題なので、ニュース的価値が高かったであろう。告発された深井氏はもちろん苦境に立たされたであろうが、告発した側の小柳氏もまったく孤立無援状態にあった。わたしは学長という立場上、配下にある小柳氏の身を案じながらも、スキャンダルやゴシップとは明確に一線を画しながら、事態の推移を見守るしか手がなかった。わたしにとっては学問上の真偽のみが重要であり、週刊誌が喜んで取り上げるゴタゴタに首を突っ込むことを潔しとしなかった（しかしのちには重い腰を上げて、自分にできる範囲で多少の援護射撃もした。しかしあくまでも友情出演の範囲内であったことを断っておく）。

さて、問題となった事柄を少し具体的に記せば、深井氏の著書『ヴァイマルの聖なる政治的精神——ドイツ・ナショナリズムとプロテスタンティズム』（岩波書店、二〇一二年）には、実在しないカール・レーフラーという神学者が登場し、彼が書いたとされる捏造論文「今日の神学についてのニーチェ」という論文が、まことしやかに議論の俎上に載せられている。もう一つの捏造記事は、『図書』（岩波書店）二〇一五年八月号（二〇—二五頁）に掲載された「エルンスト・トレルチの家計簿」という論考である。わたしは前者の問題には気がつかなかったが、後者の問題にはおそらく誰よりも早く気がついていて、わたしはトレルチ研究で最初の学位を取得したので、この記事を読んだときすぐに捏造記事であると直感した。おそらくわたしが訳したグラーフ氏の論考「エルンスト・トレルチ（一八六五—一九二三）」（F・W・グラーフ編『キリスト教の主要神学者（下）——リシャール・シモンからカール・ラーナーまで』教文館、二〇一四年、二一—二三五頁所収）から不正確な情報——グラーフ氏もそれが憶測に基づく不正確情報であることを、わたしとの個人的会話のなかで認めていた——を得、それを曲解する仕方面白おかしく潤色した読み物として成立したのが、「エルンスト・トレルチの家計簿」である。しかし尊敬するトレルチが同性愛者に仕立てられ、愛人の男子学生を託ってそのアパートの

家賃まで支払っていたなどと、虚偽の情報をまことしやかに撒き散らされると、トレルチ研究者としてはたまったものではない。たまたまその夏、わたしは科研費研究のためにドイツを訪れたので、ミュンヘンのグラーフ邸にも立ち寄ってこの話をしたところ、氏はひどく憤慨して何らかの対策をとる必要があると申された。しかしドイツと日本で連携してアクションをとるには、氏もわたしもそれぞれの仕事で忙しく、その時点で岩波書店に記事の訂正を求めるような、過激なアクションはとらなかった(ただし、その憤りは数名の人とは共有した。そのなかには小柳氏もいた)。

さて、ここで触れないわけにはいかないことは、実はわたしもグラーフ氏も過去に深井氏と少なからぬ個人的関係があったことである。わたしの前任校は埼玉県上尾市にある聖学院大学であり、深井氏はその総合研究所の准教授(のちに教授に昇進)であった。深井氏は東京神学大学大学院を出たあと、ドイツのアウクスブルク大学に留学して博士号を取得したが、当時グラーフ氏は同大学の教授のポストにあり、二人の間に形式的な接点があったからである(ただし、グラーフ氏によれば、在学中の深井氏は彼の講義やゼミには参加しなかったそうである)。さらに、氏はこれまで何度か聖学院大学の大学院特別講義のために来日されたが、二〇〇〇年の初回を除いて——というのは、初回は当時聖学院大学教授であったわたしがすべてを取り仕切ったからである——あとの回はすべて深井氏が窓口となっていた。

当時の人間関係を窺わせるものとして、グラーフ氏の二冊の書物を挙げておこう。深井智朗・安酸敏眞編訳『トレルチとドイツ文化プロテスタンティズム』(聖学院大学出版会、二〇〇〇年)と近藤正臣・深井智朗訳『ハルナックとトレルチ』(聖学院大学出版会、二〇〇七年)がそれである。しかし両書における深井氏の仕事の杜撰さは目を覆うものがある。まず前者について述べれば、あのような不良品を世に送り出してしまった責任の一端は、共同編集者であった自分にもある。わたしはドイツ帰りの新進気鋭の深井氏を信用しきっており、彼が訳出した訳稿を原文と照合する手間を迂闊にも省いてしまった。のちに教え子の大学院生と翻訳を照合しながら

ドイツ語原文を読んだとき、そのあまりのひどさに呆然とした。ざっと数えて大小二〇〇箇所くらいの誤訳があった。しかも信じられないほど初歩的なものもあった。その後、後者の書物を手にしたとき、わたしはいわば堪忍袋の緒が切れて、非常に手厳しい書評を本学大学院の『新人文』第四号（二〇〇七年）322-329頁に掲載した。

しかしまったく効果がなかった。キリスト教会も世間も深井氏を褒めそやし、彼を持ち上げ続けた。その当時、グラーフ氏にも事実関係を伝えはしたが、日本語が読めない彼は、自分の目で検証できないから仕方ないことではあったが、わたしの報告についても半信半疑であった。わたしは虚しさを感じて、その時点で深井氏の仕事については黙殺することを決め込み、批判はいっさい抑制した。しかし今になって考えれば、結果的にはそれが良くなかった。一番近隣の領域で研究していたわたしがダンマリを決め込んだために、いわばノーチェック状態を招いてしまったからである。

挙句の果てには、わたしの母校である京都大学が彼に博士（文学）の学位を授与した。これによってお墨付きを与えられ、深井氏の知名度はうなぎのぼりに高まり、ついにはわが国の神学界を担う若き第一人者のように世間はもてはやした。しかし学位授与や学術賞受賞とは逆比例的に、深井氏の仕事の粗っぽさはいよいよひどくなった。学術論文の書き方をわきまえていないとか、注の書誌情報が不正確だとの指摘は何度もあったが、当人はどこ吹く風で一向に改まる気配はなかった。こういうなかにあって、小柳敦史氏の正義感について火がついてしまった。まさに新進気鋭のトレルチ研究者として、彼は勇敢にも不正疑惑を告発する挙に打って出たのである。その後の経緯と展開については、新聞・週刊誌・テレビなどの報道が伝えたとおりである。

さて、グラーフ氏の招聘が本決まりとなった時点で、深井氏の研究不正問題はすでに決着がついていた。学校法人東洋英和女学院は、深井氏の著書や論文での捏造や盗用を認定し、学院の院長であった彼を懲戒解雇したからである。つまり小柳氏の勇敢な告発行為は、佐藤智美氏（東洋英和女学院大学副学長）を委員長とする調査委員会の徹底的な調査によって、そ

の正当性が決定的に確認された(二〇一九年五月一〇日付けの東洋英和女学院大学の「東洋英和女学院大学における研究活動上の特定不正行為に関する公表概要」参照)。それゆえ、不埒なデバンカー〔debunker:「嘘・まやかし・虚偽を暴く人」の意〕の汚名を着せられた小柳氏の名誉は回復されなければならないが、わたしはそういう面で一肌脱ぐのではなく、むしろ今回の事件を踏まえて、グラーフ氏の来日を学術的反省のための絶好の機会にしようと考えた。なぜなら、この一件には人文学／人文科学に関わる重大な問題が絡んでいると思ったからである。

今回の事件に関する一般人のネットの書き込みを読んでもと、自然科学と違って所詮人文学／人文科学は、フィクションや主観が多分に入り込む学問であって、深井氏が行った捏造や盗用は責められるべきであるが、果たして懲戒解雇に値するほどのものだったのか、程度問題ではあるが似たり寄ったりのことは、大なり小なり人文学者／人文科学者が日常的にやっていることではないか(たとえばウィキペディアの記事のコピペなど)、というのが少なからずあった。なかには、小保方晴子氏によるSTAP細胞に関する研究不正と、深井氏の今回の研究不正とを比較対照して、後者は前者に比べて圧倒的に軽微なものであって、したがって懲戒解雇という処分は明らかに不当である、という深井氏擁護論もあった。わたしは一般の人々のなかに、そのように考えている人が少なからずいることに愕然とすると同時に、人文学や人文科学に携わる者の責任も痛感した。自然科学は《サイエンス》であるが、人文学や人文科学は《サイエンス》の名に値しないのか? われわれ人文学ないし人文科学に従事する者は、自分たちが行っている研究の学問性あるいは客観的真理性をどう保証できるのであろうか? わたしが「人文学の学問性をどのように担保するのか?」(How Can We Guarantee the Scientific Authenticity of Humanities?)というテーマ設定を提案したのは、以上のようなバックストーリーがあったのである。

ところで、深井氏が犯したような研究不正事件は、実はそれほど珍しいことではない。本誌に収録されているように、須田一弘教授は自らの研究

分野から事例を引いて、非常に説得力のある興味深い発題をしてくださったが、たしかに研究不正というものはかなり古い昔から存在している。わたしが以下に紹介するのは、文献学分野における研究不正の幾つかの実例である。

たとえば、グライスヴォルトの文献学の教授であったクリスティアン・ヴィルヘルム・アールヴァルト（Christian Wilhelm Ahlwardt, 1760-1830）は、実際には存在しないナポリの写本の校合を捏造して、みずからのピンダロス批判を支持しようと試みた。一八三七年、ブレーメンの古典文献学者フリードリヒ・ヴァーゲンフェルト（Friedrich Wagenfeld, 1810-1846）は、ポルトガルの修道院で発見されたといわれる写本に従って、捏造されたサンチュニャトン〔フェニキアの作家。生没不詳〕の著作を編集した。ギリシア人のシモーニデース（Constantine Simonides, 1820-1867）による偽物ウラニオスのパリンプセスト〔Palimpseste：もともと書かれていた文字を消して再使用したパピルスまたは羊皮紙による写本のこと〕のすり替えも、大いに世間を騒がせた。すなわち、古文学者のシモーニデースは、広範な学識と写本に関する知識を有し、また卓越した能筆家でもあったが、同時に十九世紀の最も多彩な偽造者でもあった。彼は一八三九年と一八四一年の間、および一八五二年にふたたび、アトス山の修道院で生活し、そこで聖書の写本を幾つか手に入れると、また大胆にもみずから写本の偽造を行った。ウラニオス作のエジプト王の歴史という触れ込みの写本も、実はシモーニデースが精巧に偽造した贋作であったが、偉大な古典学者のディンドルフ（Karl Wilfelm Dindorf, 1802-1883）が一時これを本物と鑑定したために、やがてベルリンアカデミーを巻き込む一大事件に発展したのである。いずれにせよ、改竄や偽造、事実の捏造や意図的な歪曲などは、決して稀なことでないことがこれらの事例からもわかる。その際、各種の不正行為の主な動機は、名声欲しさや金儲けが原因となっていることが多いが、ときは根っからの虚言癖や虚栄心がなさしめる場合もある。

こうした事例に事欠かないからこそ、人文学や人文科学においては、とりわけ文献学的手続きや検証が不可欠なのである。実際、なぜわれわれ

が学術論文に詳細な注を施すかと言えば、自らの主張の論拠・出典を明確に示すためである。それは決して自分の博覧強記を誇示するためではない。読者が論述の一部に大きな関心を抱き、あるいは逆に少なからぬ疑問を抱いて、自分の目で検証しようと思ったとき、その目的に応えるだけの必要十分な書誌情報を提供することは、学術的著作物を執筆する者の最低限の義務でありマナーでもある。そこが学術論文と小説やエッセーなどの類との一番の相違である。後者の場合には、事実に基づかないフィクションであろうと、いろいろ潤色されていようと、はたまた作者の主観的偏見やイデオロギー芬々であったとしても、それ自体は必ずしもその著作物の価値を損なうものではない。そこに読み物としての魅力を感じる読者もいるからである。またそこには通常脚注を施す必要はないし、逆にもしそんなものがあれば、興ざめしてしまうであろう。

こう考えてみると、何度注意されても深井氏が不正確な書誌情報しか提供しなかったのも理解できる。つまり、深井氏は基礎的訓練を受けた東京神学大学で人文学や人文科学の基本的作法を学ばずに、研究者の道を歩み始め、やがて有名な著作家になってしまったのである。彼にとっては、論文を書くことは小説を書くことと大差がなかったのであろう。そういう意味では、彼はたしかに特別の才能の持ち主であったと思う。しかし小説を書くようなやり方で執筆されたものが学術論文として認知され、アウクスブルク大学と京都大学から博士号が授与されたとなると、われわれは博士の学位を授与した二つの大学の審査の甘さを厳しく指摘しなければならない。いずれにせよ、二つの博士論文にも類似の本質的欠陥、つまり学術論文の基礎要件を欠いた点が潜んでいるはずだ、との推測が成り立つ。実際、すでにそのような検証作業を始めている一般読者がいることを、人づてに耳にしている。ちなみに、早稲田大学は本格的な検証チームを編成して検証作業を行い、小保方氏に一度は授与した博士の学位をのちに撤回したが、京都大学には今のところそのような動きはまったく見受けられない。これは実に由々しき事態であるが、たとい自分の母校とはいえ、よその大学の審査に嘴を挟むことは適切ではあるまい。

ともあれ、このようなことをあれこれと考えて、「人文学の学問性をどのように担保するのか？」というテーマ設定となった。したがって、わたしが企画したシンポジウムは、深井氏個人を批判したり攻撃したりする意図は一切もっていなかった。グラフ氏のみならず、須田教授、小柳准教授、ブシャー准教授も、わたしの意図を十分汲み取って、それぞれの立場に基づいて貴重な発題をしてくださった。京都大学でも日本基督教会でも、未だにこのようなレベルで検証作業がなされていないなかであって、本学人文学部でこのような意義深いシンポジウムができたことを、わたしは学長として誇らしく思う。「新しい人文学」ないし「人文学の新しい可能性」を追求する本学人文学部の先生方が、今後ますます精進を積まれ、国内外にその研究成果を発表されることを切に願ってやまない。そのことを畏友グラフ氏も強く願っていることと思う。